

森川眞規雄先生と私

秋庭 裕

AKIBA Yutaka

十代の最後あたりから二十代の大半を、私は京都で過ごした。「京都」と見たり聞いたりすると、今も胸のうちで何かがすこし疼く。そして、それら京都での記憶の中、森川先生との出会いが多くを占めている。

*

振り返れば、昭和もまだまだ続く1979年春、三十歳の森川先生が同志社に着任したとき、私は二十歳、三回生だった。文化史の学生であった私は、概念や理論がない（と感じた）専攻領域が面白くなかった。そんなとき、人類学を講ずる新任の先生をたまたま知って、講筵（「英書購読」「文化人類学」）に連なった。

他学科の飛び入りだった学生も、一語自己紹介すると、とくに誰何されることなく受け入れていただいたと思う。

「英書購読」では、Adam Kuper, “Anthropologists and Anthropology -The British School 1922-72” を読んでいた。1973年初版だが、先生の手持っていた Penguin Books 版は1975年の刊行のものだった。

250頁ほどのこの本を、「英書購読」で150頁くらい読んだらうか。今思えば、学部授業としては、かなりの分量である。残りは後で一人で読んで、初めて一冊を通読した英書となり、今も愛着がある。

機能主義革命以来（アルゴノーツとアンダマン島民の出版が1922年）のイギリス社会人類学を通覧する学説史であり、生き生きとした記述にとっても魅了された。

なぜ、Kuper は面白いのかと先生に問うと、「楽屋の裏話、だからさ」という返答だったが、その意味はすぐには分からなかった。

先生の言葉は、いつも多義的で象徴的だったから、その意味は、ずっと時間をおいてから、しばしば当初とは異なった相貌で顕現する。何度も繰り返して解釈することが要求される。

楽屋の裏話が面白いとは、直接、論文には書き込みにくい、同僚・師弟、学派・学閥などの人間関係とその交流交友（と反発反目）、そして、それらに理論・思想の交錯が重ねられた記述が、学問や人物を、時代や社会の文脈の中に見事に浮かび上がらせている、というような意味合いだったのだと思う。

デュルケム流の社会学が海峡を渡り英国機能-構造主義人類学を生むドラマを描いたこの本が、なぜあの頃の先生を惹きつけていたのか、その理由を今も想像することができると思う。

1972年同志社大学文学部に提出された、先生の卒業論文は「現象学的社会学」¹⁾である。これは1980年に紀伊國屋書店の文化人類学叢書に収録されるシュッツの翻訳²⁾に繋がる起点となっているはずだ。

我が国で現象学的社会学が人口に膾炙するのは、おそらく80年代中後半だったはずなので、先生のそれは、かなりパイオニア的な着眼であったことが分かる。

1975年大阪大学文学部へ提出された修士論文は「社会学におけるモデル形成」というタイトルで、これも私は未見であるが、同年に公刊された

「状況の論理」³⁾と、問題意識はおそらく通底しているのではないだろうか。このとき指導した甲田和衛教授は、先生を評し「書かせると、いいんだ」とふと漏らしていたという⁴⁾。

ちなみに、このころの志向が、1977年に新曜社から出版されたP. ウィンチの翻訳⁵⁾を派生させているのだと思う。

そのような、社会学を哲学に近づけて彫琢していた仕事から、先生は、次第に「経験的なこと」あるいは「もう少し具体的なこと」をやりたくなったのだという。おそらく、このような時期に同志社に赴任したのだと思う。

1979年開講の「文化人類学」のテーマは、経験的なものに引きつけて社会認識の枠組みを問うというもので、冒頭、「What happened?」ということをはかして説明するかを考察すると述べられていた。

通年四単位の講義を休まず出席したが、どうもよく分からなかったのもう一度翌年も聴講した。二年目は薄っすらと筋が理解できるようになってきたが、次第にまさにこれは、かなりの範囲、Kuper がカバーした人物、理論・学説の消長に重なる問題だということが分かり、俄然、面白くなった。

先生は、「尖沙咀商人」⁶⁾として公刊される論文の予備調査を1979年夏に行ったと注記している。先生が選定した「経験的な具体」の対象は香港であった。

なぜ香港か、お聞きした記憶がないが、中国文化への尊崇や傾倒は早い時期から持っていたはずなので、ごく自然であったのかもしれない。

あるいは、97年問題とそれ以降後続するであろうグローバリゼーション時代の到来を展望し、中国研究の必要性和、切り口としての香港の戦略的重要性を見通していたのかもしれない。このあたり、まったく私の想像の域を出ないのである

が。

「尖沙咀商人」に先立って記された『「感情」の考察』⁷⁾は1982年の公刊であるから、先生の中国研究は、やはり同志社着任の頃には本格化していたのだと思う。

「尖沙咀商人」は、オーソドックスな手法と構成により織り成された秀逸なモノグラフである。香港の生き馬の目を抜くような商売をする商店の見習い店員となり、その目で内部から細密画のように商売人の世界を描き出すという肌理の細やかさと、さらにそのマイクロ世界が香港という曼荼羅的図像へ継ぎ目なく連続拡大する秘密を覗き込んでいるような記述がとてもスリリングだ。

多くのモノグラフがそうであるように、成果物からは、直接投下された努力の全貌は見えにくい。それは、マリノフスキーの『アルゴノーツ』と“A Diary”の落差にも明らかだ。

調査期間（時間）の確保、研究資金の調達、インフォーマントの獲得などなどがまず問題であるが、先生は尖沙咀において、最初、刺繍店、次、仕立屋、さらに皮革製品屋で「見習い店員として雇用され」実査を行なっている。

昔日、広東語はまだまだだとお聞きしたこともあったが、北京語・英語を駆使して「生き馬の目を抜く」商人たちに伍して調査遂行に伴ったであろう苦労は文面には残されていない。

どのような努力や忍耐があったのか知る術はないが、序・破・急の構成をとるような三部作を読み進めていくと、その達成は明らかであるだろう。

論文冒頭は香港の地理歴史の記述から入り、尖沙咀の概観に移り、さらに商業世界から、やがて個別の商店の「台所事情」にまで踏み込んで、詳細な数字にいたるまで列挙し分析を加えている。

どんな調査においても、金銭的な事柄は最困難な事項である。それが、「金儲け」の「戦場原理」

に貫かれた尖沙咀商人たちから、リアルな数字を精緻に調べ上げていることに非常に驚く。第八節「商店経営」のこのあたりは「破」にあたるだろうか。

「急」は、第九節「雇用と人間関係」からの記述で、まるでギアーツを彷彿とさせる。これまで調べ上げられ紹介されてきた具体的なパーツが組み合わされ、それらがタペストリーに織り込まれると、まるで見たことない抽象的な幾何学模様として浮かび上がってくるようだ。

香港商人の経済(的)社会関係が、伝統的文化的イデオロムをどのように再編し、駆動しているのかを微細に腑分けし、その原理を索出している。

「尖沙咀商人」は、『感情』の考察を組み込んだりして、もう少しモディファイし拡大すれば、非常に完成度高く興味深い書籍などに仕立て直すこともできたと思う。

*

先生が、尖沙咀の本調査を行っていた1982年夏、私は社会学専攻の四回生になっていた。文化史を卒業した後、社会学に編入学したのであった。

その四回生の春から、卒論をどうしようか迷っていた。偶然足を踏み入れショックを受けた猪飼野で調査してみたいと思ったが、当時はフィールドワーク実習など存在しなかったし、手軽な調査入門書や概説書もほとんど皆無だったので、思いあぐねていた。

どうしたものか、先生に相談すると「やってみたらいい」と、そっけない返事だったので拍子抜けしたが、「オレは、(香港に行くから)しばらく日本にいないけど」のような言葉が後に続き、さらにびっくりした。いざとなったら、あれこれ相談しようと思っていたからだ。

結局、夏前から鶴橋か桃谷へ日参した。何をし

たらいいか見当がつかなかったが、まずは行ってみないと何事も始まらないと思ったのである。

そして、香港へエアメールを書いた。あのとき初めて使った航空用箋の軽い感触が今も残る。猪飼野での見聞をあれこれ綴ったのだと思う。

こちらから書き送ったことはもう覚えていないが、先生から返ってきた非常に短いアドバイスは忘れたことはない。フィールドの「伝統的なものを大事にせよ」、「(知りえた)人のネットワークをたどれ」という二箇条だった。どちらも文脈を欠いていて、最初、実査の中でどう活かすのか見当がつかなかった。

それが、犬も歩けば棒に当たるものだと、その後しみじみ思ったのだが、当たったのは、済州島出身の元密入国者のHさんだった。Hさんと知り合うと、突然、見えなかった風景が鮮やかに見えてきた。Hさんの肩車に乗せてもらうようにして猪飼野を闊歩すると、俄然、私もチェジュ人の目を獲得したような快感に痺れた。

キーパーソンとかゲートキーパーという言葉は知らなかったが、金魚のフンのようにHさんにくっついて歩くだけで、多くのインフォーマントに出会うことができた。「雪だるま式サンプリング」という言葉は正確でないので好きでないが、これが先生のアドバイスの一つであったのだと合点した。

もう一つは、もっと難しかったが、活かすよう努力の指針とした。

猪飼野をウロチョロしていると分かってきたのは、コリアンの街として知られているが、そのかなりの多くが済州島出身者で占められていることで、また、猪飼野では「強制徴用・連行」のような経緯で来住した人には直接出会わなかった。それどころか、Hさんのような戦後の自発的な「密入国者」は、ときに「自主入国者」などと呼ばれ、その数ウン万人といわれていた。

つまり、濟州島から押し出されるように来阪した人々の渡航理由は、濟州島と朝鮮半島陸地との歴史的関係や経緯、それらの文化伝統、日本との歴史的・政治的関わりなどを、流布している「常識」に囚われないで解きほぐさないと、見誤るということが分かってきた。

「伝統的なものを大事に」ということを、まずは「伝統」を疑うことから始めた。戦前の大阪府市の社会調査事業報告のオリジナルを探して閲覧し、断片的な数字を拾い集め、濟州島民の大阪出稼のプッシュアップ要因を探った。するとそこに、濟州島と半島陸地の、またさらに「道」間の反目感情が、在阪濟州島民形成の大きな要因であることが見えてきた。

このようなことが分かり始めると、次に目に飛び込んできたのが、濟州島シャマニズムの世界であった。シャマニズムをインデックスとして濟州島出身者の生活を見渡すことは有意義だった。

朝鮮半島が儒教に色濃く染められていることは常識であるが、それと相補的な巫俗の世界は、つとに秋葉隆などの研究で知られている。それに連なる光景を、80年代初頭、生野・猪飼野と生駒・朝鮮寺で見聞することができた。

儒教の伝統とシャマニズムのそれ、そして、濟州島の伝統と半島陸地のそれ、そして、日本由来の要素を可能な限りで腑分けし、それらが、猪飼野の濟州島出身者の生活にどのように織り込まれているか観察した。

すると、大阪の濟州島出身者の中で創発したと思われる、いくつかの特徴が見出せた。儒教的な祭祀の世代が浅く、双系的な場合も生じること、巫俗がさほど劣位におかれていないなど、「伝統」の単なる反復ではないと考えられた。

「伝統的なものを大事に」という言葉には、おそらく理念型として「伝統」に準拠しデータを評価したり、あるいは注意深く「伝統の発明」を見

出せれば、そこに文化変動や創造のダイナミズムが観察できるという含意があったのだと思う。

香港から届いた二指針は、今日に至るまで、私のフィールドワークの原理原則である。特定の文脈に拘束されないメッセージであったからこそ、今も様々な局面で活用できる。

書き上げた「大阪における濟州島出身者」は、塩原勉・飯田剛史・谷富夫など他大学の先生方にもお読みいただいた。

*

卒論提出後、森川先生との直接の縁がなくなった。飛び込み学生の二年間と編入学後の二年間の計四年間が、先生と本当に近しく過ごした時間に過ぎない。しかし、いつ思い出しても、この四年間は極めて濃密濃厚な時間であった。

四年間のいつ頃からか定かでないが「読書会」を主催していただいて、決定的な影響を受けた。

そのとき多くのエクサイティングな論文をご紹介いただいた。中でも抜群だったのは、E. R. Leach の弟子で、Bergen School の創始者である Fredrik Barth であり、彼の“Ethnic Groups and Boundaries”は、後に非常に広範に読まれたが、(日本で)評判になるはるか以前に「読書会」で読了していた⁸⁾。

先生も、Barth の‘transactional theory’はお気に入りだったはずで、「尖沙咀商人」の末尾で言及があるほか、2012年の「多文化主義は先進的か？」のパースペクティブにまでその考えは通底していると思われる。

「読書会」が飛び切りだったのは、しばしばコシバ付きだったからでもあるが、一次会終了後、さらに「ウチに来ないか」と誘われて、西陣にお住まいだった先生のマンションにお邪魔した。

とくにご家族には、まさに大変な「お邪魔」であったと思う。通例、徹夜で朝までレクチャーとディスカッションが絶えなかったし、ときには朝

になって寝て、また起きて続きをし、さらにまた一泊させていただくこともあった。

美食や美酒への手解きしてもしていただいたが、非常なエクスタシーを感じたのは、先生は、デュルケム・モースを論じ、ジンメルを通覧し、フッサール・シュッツ・ヴィッドゲンシュタイン・ポパー・ゲルナー・清水幾太郎・ベイトソン・ゴフマンなどなど、まさに縦横無尽、耳学問三昧させていただいたことである。

もちろん、耳学問はたんに「学問」領域に留まるのではなく、文学・美術・工芸・料理・音楽などじつに様々なジャンルに及んだ。

先生が知悉し尽くした万般に、嗜みのない私だが、理解できたことは知れているが、「耳学問」を聞くうち思い当たったことがある。

シンボリックに一つ、二つ紹介しよう。

先生の料理にたいする傾倒は深く、また早い時期からのものであった。後年は、香港の中華料理について何度か論考を発表している⁹⁾。

その中で、返還以降おとずれた時代の大変化によって生じた、香港を中心とした中華料理の「革新」を分析している。ここでは細説しないが、返還とそれ以降の揺れる時代状況の中で、香港広東料理界に「風」が吹いたという表現を与えている。

「風」とは、「美味」が様々な要素の入り組んだ、偶然とも思える交錯によって顕れた、ある種たぐい稀な達成とでもパラフレーズできるだろうか。そのような「風」や「美(味)」こそ、先生の最大の関心事であったと思われる。

もう一つ、文楽のことを記しておきたい。先生が通ったのは、日本橋の国立文楽劇場が開場する前の「朝日座」時代の文楽で、私が知る第一線の演者たちの二、三代くらい上が中心であった時代だと思う。

文楽について、先生と言葉を交わすようになっ

たのはずっと後年で、先生は往年の名演を小さな劇場で真近に見ていたわけだ。「小さな箱」というのは、文楽にとって非常に重要である。

ドナルド・キーンは、世界に人形劇は少なくないが、滑稽でない人形劇は文楽のみであると述べている。そして、滑稽でないどころか、文楽の人形には、ときに人間よりも人間らしさが宿るとも指摘している¹⁰⁾。

その、生身の人間を超えるリアリティは、太夫・三味線・人形の、じつに驚異的な「分業」によって達成される。文楽人形が三人遣いであることはよく知られているだろう。当然その分業と協業もじつに驚くべきであるが、通例、太夫一人で老若の男女にわたる登場人物を語り分け、太棹三味線一本が、オペラ劇場のピットに身を潜めるオーケストラに匹敵する音響を支え、そして指揮者を欠きながら完璧なアンサンブル(三味線・太夫・人形の三位一体)が達成され、それらが奇跡的なリアリティを生むのである。

先生は、おそらく、いかに、そのような「奇跡」が達成されるのか、その微妙精妙なメカニズムや成り立ち、そして、そのコンビネーションのようなものに、深く魅入られていたのだと思う。

そのような類の「奇跡」、また「風」や「美」の探求にこそ、社会学という枠組みを凌駕して、先生の知的関心と探求の様式に通底する特質があったのだと思う。だからこそ、先生の言葉には、ときに痺れるようなエクスタシーがあった。

*

私は、生野で済州島シャマニズムに導かれ、生駒・朝鮮寺調査に加わり、次第に宗教社会学に傾斜し、さらに新宗教研究へと比重を移し、2004年に真如苑研究を上梓した¹¹⁾。

このとき、森川先生から、明示的にはたぶん一度だけ、誉められたことを覚えている。「キミは、文章が上手いな」と。

例のごとく、(多義的であるはずなので)皮肉かなとも思ったが、共著者の川端亮氏ともども四条と祇園でお招きにあずかった折の空気から、お慶びいただき、お誉めいただいているように感じた。

2017年秋、SGI-USA 研究を完成させ¹²⁾、こちらにも献呈した。もう一度誉めていただきたかったのである。しかしながら、コメントいただくことはかなわなかったのが、今も心残りである。

真如苑といい創価学会=SGI といい、仏教系日本型新宗教の、その救済思想は鎌倉仏教に淵源している。そして、鎌倉仏教にキラ星のごとく輩出した天才祖師たちであるが、その教えは、しばしば互いに排他的であるように考えられがちであるかもしれない。

しかし、少し距離をとって眺めると、鎌倉仏教には非常に大事な点で、相違点より共通性が勝ることが分かる。もっとも重要な点は、救済をしっかりと現世に定位させることであるだろう。

「この世における救い」は、祖師ごとに異なった表現をとるが、私は、それらはヴァージョンであると思う。親鸞においては「二種廻向」(この世に還ってくる)、日蓮においては「生死即涅槃」(生も歓喜、死も歓喜)のように、この世とあの世は相互に交通で結ばれていたり、あるいは二つは一つであるという理解である。

つまり、古来(梅原猛によれば縄文以来)、私たちは、あの世もこの世も、生も死も表裏一体だと考えてきたということだ。

死も、毎夜の睡眠のようなもので、人は満たされればまたそこから立ち還ってくるのだという理

解が、生も歓喜/死も歓喜という渾然一体の境地を拓くのだろう。

だとすれば、死も生とともにあるはずだ。生の中に死があり、逆もまた真である。今を生きるものたちの記憶に立ち還るなかで、死せるものも、また生きている。

私の中の、森川先生は、そういう位相にある。

*

仏教で教えを継承することを「相承」というが、甕から甕へ中味を大事に灌ぎ渡すことがその原義であるという。

森川先生から相承したと思うものを、機会あれば、私も相承してゆきたい。

[注]

- 1) 正式のタイトルではない。未見。
- 2) 浜日出夫との共訳『現象学的社会学』
- 3) 『待兼山論叢』第8号 1975年(大阪大学文学部)所収
- 4) 近年ある方からうかがった。
- 5) 『社会科学の理念』
- 6) 「尖沙咀商人」(1)(2)(3) 1986年3月・1986年12月・1987年3月『評論・社会科学』第30・31・32号(同志社人文学会)
- 7) 『感情』の考察(1) 1982年3月『評論・社会科学』第20号(同志社人文学会)
- 8) Barth, F., ed., 1969. *Ethnic Groups and Boundaries*, Boston: Brown and Company.
- 9) 「瞬間の美味」(特集 世界の中華料理)『アジア遊学』第77号 2005年など
- 10) ドナルド・キーン(吉田健一・松宮史朗 訳)『能・文楽・歌舞伎』2001年 講談社
- 11) 川端亮と共著『霊能のリアリティへー社会学、真如苑に入る』2004年 新曜社
- 12) 秋庭裕『アメリカ創価学会(SGI-USA)の55年』2017年 新曜社

「ありがとう、すみません」

～森川眞規雄先生を偲んで～

逢 軍

PANG Jun

「ありがとう、すみません」——これは、森川先生が亡くなられる5日前、体調が悪化し、病床に駆けつけた私の手を握りながら、私に残した最後の言葉でした。

私が森川先生とはじめてお会いしたのは1997年の夏でした。修士課程で日本国の国費研究留学生として選抜された私は、引き続き博士後期課程での研究を続けるべく進学先を検討していた時期に、同志社大学の方から森川眞規雄先生を紹介されて、当時、弘風館にあった森川先生の研究室を訪問しました。初対面での森川先生の印象は、寡黙ながら鋭い眼光をしておられること、魅力的な低音の声で論理的な語り方をされることでした。研究計画についてひととおり話した後の雑談は、博識でユーモアあふれる語りの連続でとても楽しく、その時、私は森川先生のもとで学位を取得することを決心しました。

私は中国の大学で物理学と海洋工学を専攻し、修士課程は人文学を学んでいたため、社会学は博士課程からの新しい挑戦となりました。秋学期からは入試準備のために森川先生の4回生ゼミで聴講し、1998年4月から正式に森川先生の門下生となりました。その後6年間、森川先生の厳しい指導の下で大学院生生活を送り、無事に博士の学位を取得しました。

私の博士学位の研究テーマは、中国農村部の出稼ぎ労働者の移動と中国の経済発展の関係でした。フィールド先は、私の故郷、中国青島市近郊の郷鎮企業で、院生時代は、調査のために長期休

暇中には帰郷して長期フィールドワークをしておりました。研究が煮詰まり停滞していた2002年の夏、森川先生から「この夏休みは、君と一緒に君の調査地に行きましょう」と申し出てくださり、本当にありがたく感じました。現地での森川先生の適切なアドバイスのおかげで、その後、学問の神様が降りてきたかの如く博士論文の執筆が飛躍的に前進しました。

2003年の春頃は、私は博士論文の執筆で連日の徹夜が続き、体が弱っておりました。ある日、森川先生の研究室に進捗状況を報告しに行った際に、森川先生は私の顔色を見て心配そうな表情をして、同期の河口さんに「生協に行ってパンちゃんに一番高いユンケルを買ってきてくれ」と告げて3000円を渡されました。厳しいながらも時に優しい、父のような存在でした。

博士課程在籍の6年間、森川先生とは中国本土以外にも台湾や東京などに学会報告などで出張ををしたり合宿をしたりと、酒を酌み交わしながら夜を徹して議論を重ね、深い信頼関係を築くことができました。博士課程が修了して、私が研究者として現在の勤務校に就職をしてからも、森川先生の研究室や町家で、研究や日中の文化や思想について議論をして有意義な時間を過ごしました。長期休みには中国を来訪されることがいつのまにか恒例となり、青島に来訪された際には私の実家に宿泊され、私の家族と一緒に食事をするなど、家族同然の関係となりました。森川先生は私の師ではありますが、その頃から時には私のことを

「親友」と紹介してくださるようになりました。

2018年、森川先生はすでに闘病生活に入られていましたが、一時退院された際に、久しぶりに森川先生のマンションで夜中までゆっくりと酒を酌み交わす機会を持つことができました。森川先生から「パンちゃん、君の最近の研究を教えてください」と尋ねられたときに、まだ始めたばかりの近江鉄道研究の話をしたところ、「ずいぶん、研究の路線が変わったね。面白い。また結果を教えてください」と進捗を楽しみにしてくださっておりました。その後、私は新聞に取材されたり、シンポジウムなどで登壇する度にご報告しておりました。その都度、森川先生は非常に喜んでくださり「一人の学者のために過去に僅かにかかわれたことが幸せです。また続報を楽しみにしております」とおっしゃってくださいました。

終の棲家となった老人ホームに入所された後も、多忙ではありましたが、できる限り週に1回は訪れて、いろいろな話をしました。次第に、「人間」とは、「生きる」とは、「死」とは、など哲学的な問答が増えてきました。余命を意識した後の森川先生は、かつての強い先生とは異なる顔を見せられるようになりました。森川先生とのメールのやり取りでも、「体調はどうですか」と尋ねると、「大丈夫だよ。順調に悪化しています」と冗談をおっしゃる時もありましたが、「怖い」と、泣き言をおっしゃる日もありました。

2020年10月14日、この日は森川先生の72歳の誕生日でした。森川先生は「今回は最後の誕生日だ」と覚悟をされていました。私と森川先生の親友である元同僚の沖田行司先生が企画した誕生日会をととても楽しみにされていましたが、残念な

がらその日に森川先生は帰らぬ人となりました。

森川先生は私にとって恩師であり、親友であり、親父であり、同じ社会学者でもあります。私の地域鉄道研究はまだまだ途上であり、結実するまで森川先生にご報告できなかったことがとても残念です。森川先生のおかげで私は現在、大学教授として日本で研究生活を送ることができています。

私が博論執筆後に迷っていた次の研究テーマについて、日本文化、京町家研究をするよう薦めてくださったのは森川先生でした。森川先生が「衝塵庵」と名付けて大切にされていた京町家は、森川先生の意志により私が買い受けて守っていくことになりました。森川先生は町家を「タチの悪い女にひっかかったようだ。次々にお金が飛んでいく」とおっしゃっておられた意味が今はよくわかります。

亡くなられる半年程前のある日、「パンちゃん、私は最近、『愛』について考えています」とおっしゃられました。「それで、どのような結論ができましたか？」とお尋ねすると、「もうちょっと待って。結論が出たら、君と議論するわ」と話されましたが、残念ながら結論をお伺いできないままに旅立たれてしまいました。波瀾万丈で孤高の人生を歩まれた最後に見出された森川先生の「愛」への哲学は、一体どのようなものだったのでしょうか。今も時折、思うことがあります。森川先生を思い出しながら、これからも私は精進し、研究者として、人として、これからも誠実に、真っ直ぐに生きていきたいと思っています。どうもありがとうございました。

追憶—森川眞規雄先生との日々—

河口 充勇

KAWAGUCHI Mitsuo

I

森川眞規雄先生には、学部2年次から大学院博士課程修了時まで足掛け12年にもわたってご指導をいただいた。私にとって「指導教授」、「師匠」と呼べる存在は先生だけだ。大学院を出てからは徐々に疎遠になり、最後に先生にお会いしたのは亡くなられる2年近くも前のこと。正直に申せば、亡くなられる前は、日々の忙しさにかまけて、先生のことを思い起こすこともほとんどなくなっていた。不肖の弟子であると認めざるを得ない。ところが、ご訃報に接した日から今日にいたるまで先生のごことが脳裏に浮かばない日は一日もない。改めて存在の大きさを痛感するとともに、お元気なうちにあれもこれも聞いておけばよかったと後悔の念が募るばかりだ。

私にとって森川先生は「アンビバレントな人」という印象が強い。器用なのか不器用なのか、勤勉なのか怠惰なのか、熱いのか冷めているのか、優しいのか冷たいのか、厳しいのか甘いのか、強いのか弱いのか…、最後までわからなかった。これまでにいろいろな人とかかわってきたが、先生ほど「わかりにくい人」はいない。亡くなられて改めて先生のことをもっと深く知りたいと思うようになった。それは「自分を知る」ためでもある。ぼんやりとした記憶を辿りながら、先生の人となり改めてふれてみたいと思う。

II

森川先生との出会いは、学部2年次（1992年

度）にさかのぼる。当時の私は、大学入学早々に目の前の環境に不適応を起こして半ば「引きこもり」状態となり（当時はまだ「引きこもり」という言葉が世の中に定着していなかった）、悶々とした日々を送っていた。その頃の私の心理状況を図式化してみると、自意識過剰（自分は特別な存在だ！）→過度な是認欲求→他人への無関心（そうであることに無自覚）→対人関係での度重なる失敗（傷心）→過度な自己否定→過度な自己防衛→過度な環境否定（責任転嫁）→「引きこもり」、といったところである。いつの時代にもいる「イタイ若者」だった。

その年に森川先生が担当されていた講義「社会人類学」を何となく受講したのがそもそものはじまりである。講義では、人類学の学説史に一通りふれられた後、先生ご自身の香港や北米華人社会でのフィールドワークをもとにしたお話へと展開された。1992年といえ、先生は40代半ば。香港随一の商業エリア・尖沙咀での小売商の商慣行や人間関係に関する調査が一段落し、カナダ・トロントを中心とした香港系移民の適応メカニズム・人間関係・アイデンティティに関する調査を精力的に進められていた頃であった。あいにく当時の講義ノートを紛失し、内容に関する記憶が定かではないが、毎回面白くて講義があつという間に終わったこと、先生が楽しそうにフィールドで起こったエピソードを話されていたこと（落語のようなネタばかり）、そして、先生の香港トークにはいつも香港への「愛情」があふれていたことが今も強く印象に残っている。先述のとおり、先

生は「アンビバレントな人」であったが、香港への「愛情」だけは終始変わらず、非常に「わかりやすい」ものであった。

この講義に触発されて、私も海外へ行って異文化にふれてみたいと思い、その年の夏に中国へ向かった。その後、長期休暇のたびに、バックパックを担いで、中国や東南アジア各地を放浪した。そこは、半ば「引きこもり」状態だった私にとって格好の「逃げ場所」だった。当時流行の「自分探し」の旅。「日常の自分は本当の自分ではない。海外に行けば本当の自分がみつかる」、そう私も信じていた。実際は、「本当の自分」などみつかるわけもなく、それを通して得られるのはさらなる自意識過剰（やっぱり自分は特別な存在だ！）であった。こうして、私は学部時代のほとんどを自意識過剰スパイラルのなかで過ごすことになった。こんな「イタイ若者」を、「子ども嫌い」を公言される森川先生がまともに相手してくれるはずがなかった。

3年次より森川ゼミに所属した。週1回のゼミはまさに「地獄」だった。授業は、F. Barth, *Ethnic Groups and Boundaries* という英語論文（エスニックスタディの「古典中の古典」、当時はまだ和訳がなかった）の輪読からはじまった。森川先生は2カ月程度で読了すると考えておられたようであるが、われわれゼミ生の英語読解能力が先生の要求水準からほど遠く、さほど長くもない論文1本を読むのに1年近くもの時間を要した。私は4週連続でやり直しをくらったうえ、最後は「これ以上君に付き合っても時間の無駄だからもういい」と突き放される始末。先生がわれわれに求めたのは、冠詞（a, the）の使い方にまでこだわって読むこと、本当に「わかる」まで徹底的に読み込むことだった。このような読み方を徹底的に叩き込んでいただいたおかげで、それから英語文献を読むことがあまり苦にならなくなった。それに

気づくのは大学院に進学してからである。

3年次の後期には大学院進学を考えるようになったが、それは学問への探求心からではなく、就職活動から逃げたかったからである。ちょうどその前年あたりにバブルがはじけ、就職氷河期がはじまっていた。突然「はしご」をはずされたような状態になり、根拠のない自意識がもろくも崩れ、「こんな不適應人間、厳しい企業社会でやっていけるわけがない」という心境になった。学問に対して失礼きわまりない話である。

卒論からも逃げた。もともとは「自分探し」の旅で訪れた中国辺境のエスニック関係について書きたかったのだが、踏ん切りがつかないまま時間が経過し、結局は、自分自身の「恥部」を晒すような現代若者論をやっつけ仕事で書いた。いったいどんなタイトル、テーマ、内容だったのかさえ覚えていないが、唯一記憶に残っているのが謝恩会の場で森川先生からいわれた一言、「君の卒論はクソつまらんかった」。それがなぜか妙に心地よかった。過去のことにはとらわれず、一生懸命に学問に向き合おうと心に決めた。

III

ところが、大学院進学後も私は不適應を起こし、早々に「撤退」を考えるようになった。すぐにも就職活動をはじめ、修士課程を終えたら適当なところに就職しようかなと考えた。これまた失礼な話である。ただ、その時に思ったのは、森川先生とは「撤退」後も個人的な付き合いをつづけたいなということ。なぜそう思ったのか今もよくわからない。だから、修士課程の2年間は真剣に学問、そして、先生と向き合おうと思った。それから3日にあはず森川研究室を訪れては、中国研究・華僑華人研究の基本文献を片端から借りて読んだ。読み進めていくうちに先生との会話の糸口もみつきり、楽しくなってきた。その頃、先生

はよくおっしやっていた、「院生というのは、食事、睡眠、風呂以外の時間はすべて勉強するものだ」と。実際、その頃の私は本気でそれを実践しようとした。人生で最も多く活字を読み、そして最も急激に視力が落ちた時期であった。私はただ「撤退」したくて頑張ろうとしたのであるが、皮肉なことに、先生は「河口は本気になった」と勘違いされたようだ。

修士課程1年目の夏期休暇が終わろうとしていた頃、森川先生から思わぬ提案を受けた。「香港に留学しないか?」。忘れもしない、その日は1995年9月20日、私の人生が大転回した日である。その頃の私は、そろそろ自分の本心（修士課程を終えたら「撤退」するつもりであること）を先生に伝えなければならないと感じており、その日、夏の香港調査から帰られたばかりの先生を訪ねることにした。「お話があります」と私から切り出すと、「僕も話がある」という思わぬリターン。当然の礼儀として、私は先を譲った。そこで出てきたのが先ほどの一言。つづけて、「香港中文大学のDavid Wuさんに話を付けてあるから、とりあえず1年ぐらい行っておいで」と。David Wu（呉燕和）先生は台湾出身の文化人類学者で、その当時、香港中文大学人類学系の主任をお務めであった。まったく想定外の展開であったため即答しかねたが、そのうちじわじわと嬉しさがこみ上げてきた。気にかけていただいたことが、ただただ嬉しかったのだ。その日のうちに気持ちは固まった。それから頻繁に森川研究室を訪れ、香港研究の基礎文献を読み漁った。会話の糸口はさらに広がった。

あの日、もし私が先に話を切り出していたら、その後の私の人生はどうなっていたのだろうか。間違いなく、人生最大の転換点であったと思う。

1996年9月、私は、同志社大学の交換留学制度を利用して香港中文大学へ留学することになっ

た。

IV

森川先生に背中を押されて、意気揚々と乗り込んだ香港であったが、早々に出鼻をくじかれた。広東語をゼロから学びながら、香港中文大学人類学系の大学院科目をいくつか履修するも、まったくついていけなかった。一応の研究テーマを用意していったものの、研究どころではなかった。ここでまた不適応を起こし、留学中に「引きこもり」というありえない暴挙に出た。

その折に救いとなったのは、子どもの頃から好きだった映画である。香港中文大学の図書館にあった映像コーナーに毎日入り浸り、いろんな国のいろんなジャンルの映画を手当たり次第にみた。不思議なもので、ここで得たストックは、その後の私の人生にとって大きな財産となり、映画好きの森川先生との会話の糸口にもなった。

1997年7月1日の「香港返還」を現地で経験した後、同年8月に帰国。結局、1年間研究らしいことは何もできず、広東語の運用能力も「引きこもり」がたたって伸びなかった（英語も中国語も同様）。帰国後、森川先生のもとへ挨拶に伺い、留学期間の「窮状」を恐る恐る報告したが、「おきばりやす」の一言で突き放された。その折に救いの手を差し伸べてくださったのが服部民夫先生である。その前年度に社会学専攻の専任教員になられ、半年間先生の授業に出ていた。森川研究室を出た後、すぐ隣の服部研究室のドアをノックした。ドア向こうの服部先生は満面の笑みで私を迎えてくださった。私は、ここでも留学期間の「窮状」を訴えた。先生はそれをずっと面白そうに聞いてくださった。そして、私に問われた、「それでも研究を続けたいと思ってる?」、「はい、できれば続けたいです」、「それでいいんだよ。その経験は後で必ず役に立つ。今までは君のことを『学

生』とみなしてきたけど、これからは『同業者』とみなすからね…。それから、先生はご自身の韓国留学中のご苦勞をたくさん話してくださった。この日のことを思い出すと、今も涙が溢れる。

こうして、私は、森川ゼミと服部ゼミという2つの「居場所」を得ることでできた。両先生の個性を反映して、両ゼミは表面的には異質であったが（あまり人が寄り付かないゼミといろんな人が集うゼミ）、深いところでは研究理念も教育理念も共有されていた。両先生はともに松本通晴先生門下である。

博士課程に進学した私は、両先生のご指導のもと、改めて研究基盤を構築することになった。この時期、服部先生を通して、韓国というもう1つの比較対象を得たことは大きな意味をもった。この頃のストックが今になって生きている。

1999年9月、私は2回目の香港留学に踏み切った。今回は、博士論文を書くためのフィールドワークを行なうことが目的であった。前回よりは研究基盤が整い、言葉や文化の「壁」もある程度解消されていた。既存の香港研究（社会学・人類学分野）を読み込んだうえで、郊外ニュータウンの社会環境（居住と移動のメカニズム）に研究ニッチを見出し、そこに焦点を置いてフィールドワークを行なおうと考えた。前回よりそれなりに勝算はあったが、現実はその甘くなかった。人の流動性が非常に高く、人間関係が希薄な社会環境において、フィールドワークのための基盤構築にてこずり、思うようにインフォーマントを得ることができなかった。1年半の滞在期間は瞬く間に過ぎ去り、不完全燃焼のまま2回目の香港留学を終えることになった。2001年3月のことである。

失意のなか通常の大学院生活を再開することになったが、今回の救いは逢軍さん（博士課程の同期）の存在であった。逢さんは私より一回り上

で、私よりはるかに「大人」だった。森川先生からはいつも「君は本当に気が利かん。逢ちゃんを見習え」といわれてばかりだった。逢さんは私にとって「お手本」であり、心強い「仲間」であった。いつの頃からか、逢さんと私は、森川ゼミの「助さん、格さん」と呼ばれるようになった。

香港でのフィールドワークは不完全燃焼に終わったものの、森川先生に尻を叩かれ、逢さんと助け合いながら、博士課程6年目での博士論文提出を目指すことになった。調査データは穴だらけであったが、香港に関する先生の研究成果を借用しながら、何とか取り繕い、不完全ながら形にすることができた。博士論文の副査は、社会学専攻の尾嶋史章先生と慶応義塾大学の吉原和男先生にご担当いただいた。2004年5月に行なわれた口頭試問は、予想に反して終始和やかな雰囲気であったが、終了間際に尾嶋先生からいただいた一言（まさにカウンターパンチ）が心に突き刺さった。「河口君はこのテーマに愛がないよね…。凶星だった。それを聞いて森川先生は高笑いをされていた。私は、先生の「土俵」で研究を行なうことに限界を感じていた。

実は、この頃すでに私は香港とは異なる調査フィールドをみつけ、動き出していた。

V

時間はその3年前にさかのぼる。2001年3月末、2回目の香港留学から帰国した私は、恐る恐る森川研究室を訪ねた。また「おきばりやす」の突き放しが来るのかと覚悟していたところ、思いもよらぬ展開になった。「この4月から台湾のことで調査実習をやるから、君が授業やって…」、「え？ 僕、台湾は1回旅行したぐらいで、何も知りませんが…」、「大丈夫。死ぬ気で猛勉強したら、2週間で何とかなるから…。この「むちゃぶり」により、私は台湾という新しい調査フ

フィールドに目を向けることになった。

調査実習というのは、2001～02年の2年間にわたって開講された森川先生ご担当の「社会調査実習－同志社と台湾留学生－」のことであり、逢さんと私がティーチングアシスタント（TA）を務めた。学部3～4年次配当科目で、2年間で延べ15名が受講した。具体的な実習内容は、戦前・戦後を通じて同志社で学んだ台湾留学生（台湾校友）を対象にしたライフヒストリー調査を行なうというもの。両年度とも夏期休暇期間に2週間ほど台湾に滞在し、現地調査を行なうというハードなものであった。この調査実習について詳しくは、本号掲載の拙稿「日台交流史への社会学的接近－2つの『出会い型調査』を通して－」を参照されたい。

森川先生の「むちゃぶり」を受けて、私は、「丸投げTA」として授業運営全般を取り仕切ることになった。先生は基本的に授業には出られず、研究室にて待機された。授業方針に口出しされることもなく、すべて私に一任してくださった。まだどう転ぶかわからない当時の私に対して信頼と期待を寄せていただいたのだと思う。先生の立場になって考えてみると、よくもそんなリスクをとられたものだ、改めて感謝の念に堪えない。

1年目の夏の台湾現地調査の折、私ははじめて陳其南先生とお会いした。先生は、中華圏を代表する人類学者であり、台湾では「社区総体营造」（市民参加型まちづくり）の産みの親として広く知られる人物である。幸運なことに、先生は2001年度後期より社会学専攻の客員教授に着任され、それからの1年間、私は先生の授業を通して同世代台湾の文化政策やまちづくりの最前線に関する貴重な学びを得ることになった。私はどんどん台湾の魅力に惹かれていった。香港ネタで博士論文を書きながら、心はずで台湾の方を向

ていた。

ちょうどそんな時期に服部先生（2001年度末をもって同志社大学をご退職）と雑談する機会があり、こんな言葉をかけられた。「河川君、香港はしんどくないか？台湾の方がいいぞ」。先生は韓国研究のご専門であるが、台湾にも造詣が深く、比較研究をなさっていた。「どうして台湾の方がいいんですか？」と聞き返したところ、「そりゃ、台湾のほうが広いからだよ！」というわけのわからない答えが返ってきた（笑）。おそらく、服部先生は、香港（森川先生の「土俵」）で私が行き詰まっていたことを察知し、それとなく台湾に目を向けるよう促してくださったのではないかなと思う。

2003年度末に博士課程を修了した後、運よくポスドク職を得た私は、その後、主たる調査フィールドを香港から台湾へ移すことに決めた。「広い」台湾において私が注目したのは、縁あってつながった新竹というまちである。「台湾シリコンバレー」と称される世界有数のハイテク産業集積地であり、香港とはまた「似て非なる」、グローバル時代のフロンティアである。そこは、森川先生、服部先生、陳先生から学んだことをすべて活かし得る理想的な調査フィールドであった。この新竹との出会いにより、私はようやく自分自身の「土俵」を得た。そして、研究対象に対してはじめて「愛情」をもてるようになった。新竹での調査活動について詳しくは、本号掲載の拙稿「日台交流史への社会学的接近」を参照されたい。

VI

森川先生からは、研究・教育活動以外でも大きな影響を受けた。院生の頃、先生から事あるごとに「君は森羅万象に興味をもとうとしないから、つまらん」といわれた。残念ながら、いわれている当人が言葉の本質を理解しておらず、先生はき

っと歯がゆい思いをされていたのだらうと今になって思う。当時の私は、興味のあること以外は知らなくてもよいと考えていた。そんな自分を内省する力もなかった。そのせいで、いろんなチャンスをフイにってしまったと思う。

森川先生は、文化教養のカタマリのような人であり、いろんな教養世界に通じておられた。映画、古典芸能、飲食文化、書画、焼物、刀剣、楽器、整体…、例をあげればキリがない。私はそんな先生からいつも小馬鹿にされながら、いろんな世界へと誘っていただいた。なかでも私の人生にとって特に大きな意味をなしたのが落語と酒（特に日本酒）である。

まずは落語にまつわるエピソードを紹介しよう。修士課程1年目の後半、ようやく森川先生と差して話ができるようになった頃、先生にどうしたらプレゼン能力が上がるかと質問したところ、返ってきた答えが「落語を聞け」。すぐにその場で桂米朝「百年目」が入ったカセットテープを貸してくださった。その夜にはじめて聞いた「百年目」は衝撃的だった。世の中にはこんなに面白いものがあるのかと、そのまま3回聞き返した。脳が興奮して朝方まで眠れなかった。翌日、先生にその感動をストレートに伝えたところ、「次はこれ」と渡されたのが、桂三木助「芝浜」が入ったカセットテープ。その夜も前夜と同じことが起きた。翌日、森川研究室に行くと、別のカセットテープが3本テーブルの上に置かれていた。「次」が用意されていたのだ。嬉しかった。それから何年か毎晩寝る前のひと時、先生から拝借した落語テープを聞きつづけた。そのうち落語が「睡眠導入剤」となり、落語を聞かないと寝付けない体になってしまった（笑）。

落語にハマったことで、歌舞伎や邦楽、着物、さらには日本語そのものにも興味をもつようになった。落語は、いろんな世界とつながる、まさに

「総合芸術」である。また、落語を聞くようになって、話し方（アイコンタクト、話の間、発声など）や話の組み立て方にも興味が沸いた。落語は非常に有用なプレゼン教材である。最近、私は、学生たちへのプレゼン指導において積極的に落語を活用している。若手落語家をゲストに招き、落語に学ぶ話し方講座を学生向けに企画したこともある。

一方、日本酒に関しても思い出深いエピソードがある。2000年春に留学先の香港から一時帰国した際、森川先生に連れられて京田辺の蕎麦処「山ぶき」に足を運んだ。そこで出てきたのが滋賀の地酒で、それまでに飲んだ日本酒とはおよそ別次元のおいしさであった。香港広東料理に関する先生のエッセー「瞬間の美味」（『アジア遊学』第77号、2005年）で使われたフレーズを借用するなら、それは、「身体の細胞の1つ1つに風が吹き通るような気持ち」にさせられるおいしさであった。この日を境に、私にとっての日本酒は「なくてもいいもの」から「なくてはならないもの」へと劇的に変化した。それまで抱いていたネガティブな日本酒イメージはすべて覆るとともに、私は、酒造業や酒文化に向けて積極的に「アンテナ」を立てるようになった。

それから5年後、私は、大学院時代の先輩に当たる藤本昌代先生（当時社会学専攻助教授）とともに、京都伏見酒造業を対象とした調査に取り組むことになる。これが契機となり、その後、私は、伝統産業、老舗企業、経営理念、事業承継、文化遺産といった「継承」に関する研究に従事していくことになった。これまでに私が探求してきた様々な研究テーマは、「越境」（空間を越えるもの）と「継承」（時間を越えるもの）の2つに大別することができる。前者についてはいうまでもないが、後者に関しても森川先生とのコミュニケーションのなかでつながったものである。曲が

りなりに「森羅万象に興味」をもてるようになってよかったですと心から思う。

VII

森川先生は言葉の達人であった。若き日の社会学の哲学の研究、そして、文化教養への飽くなき探求が先生の類まれな表現力を創り出したのだろうと思う。先生からはいろんな言葉を教わったが、その1つが「ボンサンス (bon sens)」である。カタカナ表記で使われており、国語辞典を引くと、「正しい判断力」「良識」といった解説が付されているが、どうもしっくり来ない。最後に先生にお目にかかった際に、この「ボンサンス」の適訳について伺ったところ、「あえて訳すなら、『悟性』がいいかもしれない」との回答があった。「悟性」とは、経験界に対する知性を意味している。

この回想文を書くに当たって、何か参考になるものがないか探したところ、2003年度「社会学人類学」の講義ノートが出てきた。その頃の森川先生の講義は、その前後に比べて明らかに先生の「熱量」が大きかった。もしかすると、逢さんや私のことを考えて渾身のネタを仕込んでいただいていたのかもしれない。特に2003年度は私の博士課程最終年度であり、もしかするとこれで先生の講義を聞くのも最後になるかもしれないの思いから、私も必死にノートテイクしたように記憶している。そのノートのなかに次のようなメモをみつけた。

研究をはじめる前に存在するのは、stereotypes、folk models、そして先行研究。どれもが影響力をもっている。これらのどれかに依拠すれば、とりあえずの根拠はついてくる。しかし、研究とは、本来既成のものを超えることを目指すべきである。こうした既成のものから距離を取るうえで、「記述」という作業が非常に

重要な意味をもつ。

では、stereotypes や folk models、先行研究といった既成のものを超えた先にあるのは何か。それが「ボンサンス」であると森川先生はおっしゃった。

「僕が理想とするのは、『リファレンスなし』の完全オリジナルな論文」と森川先生はよくおっしゃっていた。その頃の私は、「リファレンスではできるだけ多い方がいい」、「世界的な権威が書いたものに依拠する方がいい」と安直に考えていたので、先生が何をおっしゃりたいのかさっぱりわからなかった。今はそのお気持ちがよくわかる。

さらに、その講義ノートには次のようなメモもあった。

すでにある stereotypes や folk models、先行研究から研究者が自由になることは容易ではない。

香港研究は stereotypes や folk models、先行研究に雁字搦めにされたものばかり…。

森川先生の香港研究は、こうした「雁字搦め」状態から香港という調査フィールドを解き放そうとするところからはじまったようだ。

森川先生が深くコミットされた1970～90年代の香港は、何にも縛られたくない先生にとって「おあつらえ向き」の調査フィールドであったように思う。先生はよくおっしゃっていた、「香港には20世紀がほとんどなかった」と。先生らしいトリッキーな表現である。どういうことかという、1960年代までの香港は「19世紀」(レッセフェール型植民地)がガラパゴス的に残っていたが、1970年代に入ると、大きな行政改革(公共サービスの大幅拡充)があり、市民の間に香港への帰属意識が高まったことで、「20世紀」らしき

もの（国民国家もどき）が出現した。ところが、1980年代に入ると、「1997年問題」を背景とした空前の移民ブーム（10年間に人口の1割が流出）とその後のトランスナショナルな社会空間（先生いわく「拡大された香港エリア」）の生成により、香港は世界に先駆けて「21世紀」（国民国家の枠組みを大きく超えた社会）の扉を開くことになった。

このように、香港は極めて特殊な歴史をもち、かつ近未来の社会のあり方を先鋭的に映し出してきた存在でもある。それゆえ、1980年代以降の香港は、既成の「型」にはめるのが難しい社会である。その意味で、調査フィールドとしての香港と森川先生の間には大きな親和性があるように思う。なぜなら、研究者としての先生もまた既成の「型」にはめるのが極めて難しいからだ。私がみってきた先生は香港に対して深い愛情をもつだけでなく、自分自身を投影されていたようでもある。

森川先生が長年にわたり香港という調査フィールドを通して追求されてきたのは、まさに「ボンサンスの社会学・人類学」であったのではないだろうか。

VIII

私が香港研究を離れてから早いもので18年も

の歳月が流れた。その間、台湾や日本国内においていくつか調査フィールドとの「幸福な出会い」があり、何とか研究者として生き残ることができた。今思うのは、また香港研究をやってみたい、ということだ。これというネタがみつまっているわけではないが、香港のことをもっと深く知りたい。厳密に言えば、香港で森川先生が考えてこられたことをもっと深く知りたいのだ。何年かかかるかわからないが、いずれ「森川真規雄と香港研究」と銘打ったエッセーを本誌に寄稿できたらと考えている。その作業を通して自分に合った香港ネタをみつけられたらと思う。

先述のように、私は今「継承」に関する様々なテーマの研究を行なっている。いろんな世界の継承事例にふれるなかで、私自身も継承の当事者であるという意識が高まってきている。森川先生が亡くなられてから特にそう意識するようになった。森川先生や服部先生をはじめ多くの先達から受け継いだものを自分なりに咀嚼したうえで次世代に引き継いでいけたらと考えている。

森川先生、ありがとうございます。過去を振り返るといろんな思いが去来しますが、受けた学恩に対して感謝の念に堪えません。

森川眞規雄先生を偲んで

藤本 昌代

FUJIMOTO Masayo

森川眞規雄先生の学恩に深く感謝すると共に、ご冥福を心よりお祈り致します。

私が初めて森川先生とお目にかかったのはM1の春でした。私は同志社大学大学院文学研究科社会学専攻の2期生で、先生方が奔走され、修士課程を設立されたばかりの時期でした。まるで新設校の熱気が大学院全体にあり、先生方の院生成ムードと大勢の先輩、同級生、下級生がいて、大学院が大変にぎやかだった時代です。今から思えば、当時、先生は40代半ばで、今の私よりも遙かにお若い中堅世代でした。眼光鋭く、授業でも発表担当者の努力が不足していると5分で「やり直し」を宣告され、院生にとって非常に怖い先生でした。春学期の最初の頃、私も森川先生には怖い印象しか持っていなかったのですが、学部の授業でTAに入らせて頂いた時に、壮大なテーマをととてもわかりやすく、学生がワクワクするような説明をしておられ、タッチも優しく、なんて興味深い授業をされるのだらうと思いました。無謀な私は森川先生に「学部生にはあんなに優しく楽しく、しかも興味が湧く授業をされるのに、どうして院生にはあんなに厳しいのですか？」と質問したところ、先生からは「当たり前だ、院生は『研究者の卵』で、自分たちと同じ土俵に立っているライバルだから、真剣勝負をしてるんだ」とお答えになりました。私にはM1の初心者が教養深い先生のライバルになりうるとは思えませんでした。先生は「こっちは本気でやっているんだから、お前たちも学部生の感覚で授業準備をし

て来ないで、本気がかかって来い」という姿勢で授業をして下さっていたのだと思いました。

私が修士課程の時に森川先生が招聘された陳其南先生の授業は、はじめて外国人の先生の授業を受講する機会でも、とても興味深かったのを覚えています。その時に森川先生がおっしゃったのは、院生に海外の研究者に直接、接する機会を与え、刺激を与えるのも教員の務めであり、自分がその立場になったら、そういうことをするように、とおっしゃっていました。今でも語学は得意ではありませんが、森川先生が、留学生が日本語でヒアリングできなかった時に概要を英語で説明できるよう、また、院生に海外の研究者に接する機会を与えられるようにと、海外で研究することをお勧め下さいました。私がフランスに行く際にも1人でも知り合いが多い方が安心だろうと、受け入れ先のフランス社会科学高等研究院におられる森川先生のお知り合いの先生をご紹介下さいました。これらの経験をさせて頂いたことが、今の研究、海外の研究者とのネットワーク作りに大きくつながっています。

博士課程時代の思い出は、博論構想発表会や同志社社会学研究学会での発表で、今はもう鬼籍に入られた主査の北村日出夫先生や副査の服部民夫先生と、発表会後に院生の研究をサカナに「博論は、映画のストーリーを描くように、大きなテーマ、流れの中で、各パーツにどういう意味をもたせるか、ということ意識するのだ、各論だけではだめで大きなテーマにつなげていくといい話に仕上がる」「先人が積み上げたレンガに小さくて

もいいから、自分が生み出した概念を積み足すんだ」「今のネタをもっと抽象度の高い概念につなげたら、いい研究になる」と、ワイワイ、楽しそうにお話をされていました。この表現は今も院生たちに使わせて頂いています。

また、博論を書籍化する際に、校務の時に一緒に副査の尾嶋史章先生と森川先生にタイトルを相談し、アイデアを頂いたり、河口充勇先生と一緒に伏見全域の酒造業調査をした際、そのご縁で2人でプロデュースした「大吟醸純米酒『七五三太』」の命名も森川先生にご相談しました。このお酒は、森川先生が当時の学長の八田英二先生にご紹介下さり、今では同志社日本酒として公式グッズに入れて頂いています。

そして文学部に就職してからも、いつも専攻教員間のコミュニケーションに気を配って下さって、よく宴会にも誘って下さいました。その後の社会学部設立準備委員会でも専攻の先生方でよく

集まって（続きで食事会もよく行って）、一生懸命、理念、カリキュラム、諸制度の設計に議論を重ねることができました。当時、一番、下っ端だった私は雑用係で知らない仕事大量に降って来て必死でしたが、全ての先生方の思いのこもった、とてもよいチームワークだったと思います。森川先生は社会学部発足後も、びわこリトリートセンターでの教員、院生とのコミュニケーションの場を作って下さっていました。

森川先生は、いつもスマートで、こよなく美しいモノ、文章を愛され、私のように浅学非才な者でも、必死に教えを乞うと寛大に接して下さい、人間味溢れる先生でした。きっと今頃、天国で、北村先生や服部先生にチャチャを入れながら、楽しそうにお話をされていると思います。森川先生の学恩に深く感謝しつつ、心よりご冥福をお祈り致します。

【回想：森川眞規雄先生】

森川先生からいただいた絵

板垣 竜太
ITAGAKI Ryuta

森川眞規雄先生は、本当に博学多才な方でした。今回掲載するのは2019年に森川先生ご自身が描いて、私に贈ってくださった1枚の絵です(次頁)。経緯を少し説明します。

私は2018～19年度に、京都朝鮮中高級学校を主対象とした社会調査実習をおこないました。2019年3月28日、壬生の施設におられた森川先生のお見舞いに行ったとき、刷り上がって間もない2018年度の報告書をお持ちしました。ご体調から考えて、読んでいただけるものとは考えておらず、最近はこのことをやっているという報告ぐらいのつもりでお渡ししたものでした。ところが、思いもかけないことに、森川先生が目を通してくださり、4月1日にメッセージをくださいました。この学校は現在銀閣寺のそばにありますが、1953年から1958年までは「丸太町通御前下ル」にありました。そのことが森川先生の幼少時の記憶を刺激したようでした。

いただいたメッセージの概要は次のようなものでした。実習報告書を読んで思い出した。西大路御池にいた子どものころ、国鉄山陰線の「ガードの手前」は「怖い場所」というイメージがあった。「ガードの手前の朝鮮学校」が、そのイメージの元だったように思う。当時高架橋は、千本通の西側と丸太町通の南前に2つあったが、子ども心に「千本は繁華街近くの楽しいガード」、「丸太町は暗いガード」だった。一読、懐かしかった。

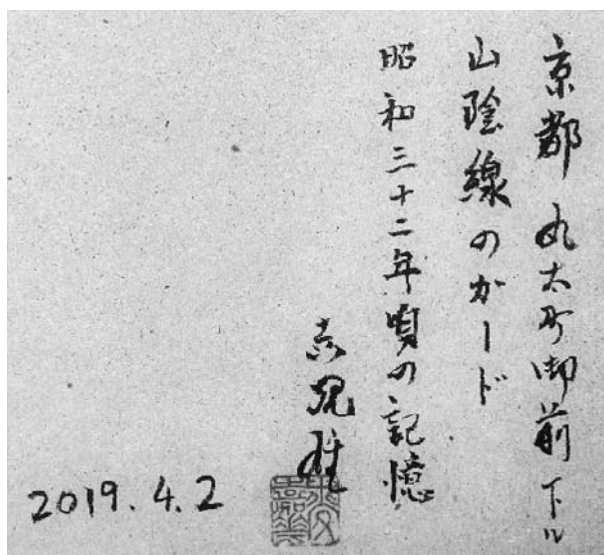
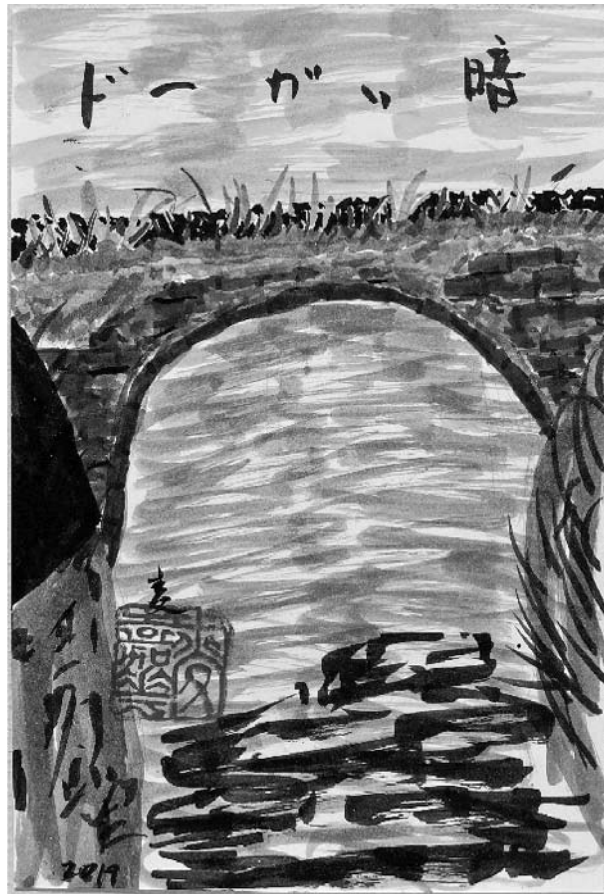
そのSMSのやりとりから1時間もたたないうちに、「暗いガード」と題された1枚の絵の画像が送られてきました。まさかと思い、半信半疑で

「これは森川先生の絵？それとも…？」と返信すると、「さっき描いた」とのことでした。次にお見舞いに行ったときには、既にこの絵は丁寧に額縁に入れられていました。私はありがたくいただき、翌年度の報告書には「附録」として掲載しました。今も研究室に飾っています。

それにしても、森川先生が多才なのは知っていましたが、病床におられるにもかかわらず、このようにさっと記憶のなかの情景を形象化できてしまうことに、私は驚嘆するとともに、心の底から感銘を受けました。私には、森川先生のまねごとはどういできませんが、この思いと精神は何か受け継いでいきたいと思います。



ご退職後に京都三条のご自宅にて (2018年5月)



森川先生のこと

小林 久高

KOBAYASHI Hisataka

森川先生が亡くなって、とても寂しい気持ちになりました。それはそばにいた誰かが亡くなってしまった悲しみというよりも、世に不在であること自体がどうにも残念でならないという、虚しさに関わる寂しさです。

僕は多くの先生のお世話になってきました。安田三郎先生、先生は週の半分は研究室に寝泊まりし勉強しているような先生でした。居安正先生、お酒を飲んで政治について議論するのが大好きな先生でした。中野秀一郎先生、「小林君はきれいな絵に描いた餅を卒論で書いたんだな」という実にその通りの指摘には頭が下がりました。大村英昭先生、ある雑誌に僕の書いたものに対する「べた褒め」の批評には参ったものです。

みなさんまったく別のスタイルの社会学者でしたが、どの先生もとても魅力的な方々でした。そんなすべての先生にいえることは、独立した自営業主として社会学に取り組んでおられたことです。野武士のように、といったほうがいいかもしれません。「大学人は学問的真理の追究以外のことについては無頓着でいい、他のことはどうでもいい」という感じの先生ばかりで、権力好きであっても決して「組織人」にはならない方々でした。学会は野武士の共同体であり、大学は自営業

主の集まりのようなところでした。

そんな先生方がみなさん他界され、今度は森川先生です。僕は、先生のあざやかな剣さばきで大学院生がばたばた倒されるのを見てきました。先生は何といっても急所を見極めるのが上手でした。そして他の先生方と同様、「組織人」からかけ離れた方でした。作法を知りつつ作法を超越するといったほうがいいかもしれません。

森川先生のことを思うとき、パレートの残基と派生体の話がよく頭に浮かびます。「根本的な残基の部分がわかっていなければだめだろう」というのが先生のもっとも基本的な姿勢だったような気がするのです。それはご本人の中で「もうすべてわかっている」という思いと「まだ何ひとつわかっていない」という思いを複雑に絡ませたような精神を生み出していたように思います。それが中途半端な研究の急所を突くような姿勢につながっていたような気がするのです。

森川先生のような自由な大学人がまた一人去られ、僕は寂しい限りです。僕に残されている時間もそう長くはありませんが、しばらくは、僕もまた自由な大学人として研究をつづけていきたいと思っています。

森川先生、ありがとうございました。

森川さんのことば

尾嶋 史章

OJIMA Fumiaki

森川さんにはじめて会ったのは、1996年の関西社会学会。学会会場ではなく懇親会後の居酒屋だったと記憶しています。大学院の先輩だったので、その時同席した他の同窓に紹介され名刺交換をして、「森川です」という例のドスのきいた声をはじめて聞きました。森川眞規雄という名前は翻訳本を通して学生時代から知っていましたが、これが噂の森川か、と本人を前にしてあらためて思ったのを覚えています。まさかその3年後、同僚として働くことになるとは当時は想像できませんでした。

お酒が入ると饒舌になることもありましたが、普段は寡黙な人。思い出すのは森川さんがいろいろな場面で放った「ひと言」です。新入生のオリエンテーションで恒例の「早く人間になってください」などはその典型ですが、当時の博士論文の構想発表会でのことばの数々も、記憶に残るものが多くあります。

今は授業の中に組み込まれて日常化したイベントになっていますが、今から20年前、大学院が設置されて間もない頃の構想発表会は院生にとっては修羅場。当時の院生の人たちは「清水の舞台から飛び降りる」気持ちで登壇していたのではないのでしょうか。怖いお父さんを自認していた森川さんのことばは、いつも的を射ていて、厳しかった。壇上で返すことばをなくした院生を数多くみたように思います。その中にこんな指摘がありました。

「世界中を探せば、絶対同じようなアイデア

の研究にぶつかる」

これは自分の研究がオリジナルなものだと報告した院生に対して投げかけたことばでした。少し抜けて考えるなら研究者の「独善」を戒めるようなことばだったように思います。研究者としての自分の立ち位置を確認する、必須の規準です。

同志社に就職して数年経ったとき、何の話の流れの中からだったのかは忘れましたが、急に「あんた、最近真剣勝負してないやろう」と言われて、どきとした記憶があります。論文はそれなりに書いて、いろいろ研究活動はしていたつもりでしたが、「真剣勝負」といわれると・・・していません。確たる「証拠」があつたことばだったのかどうかは定かではありませんが、今も心のどこかに引っかかっています。

森川さんをはじめ、同志社には団塊世代の先生方が多くおられました。同志社の歴史に名前の残る方々も、まさに団塊と呼ぶに相応しい数になることでしょう。ただその中でも森川さんほど、周りの人に記憶に残ることばを残した人はいません。

その後十数年の間に真剣勝負ができたのか、と問われれば、まったく自信はありません。世界を探して真剣勝負ができるのか。今の私の歳には「研究はやめた」と宣言して研究室の片付けを進めていた森川さん。たまに夢に現れる森川さんに何と報告しようか。それを糧に、今しばらく精進したいと考えています。

森川眞規雄先生を悼む

立木 茂雄

TATSUKI Shigeo

本当の美味に出会ったときは「身体の細胞の一つ一つに風が吹き通るような気持ち」がする、という文章（森川眞規雄「瞬間の美味」より）を、恐らく一生忘れることはない。美味だけでなく、絵画や書画、骨董への審美眼こそが森川先生の社会学の真骨頂のひとつであり、芸術作品に刻み込まれた社会的事実としての美に近づけるには、「風が通る」ことをつかみとる研ぎ澄まされた教養があってこそ始めて可能なのだと教えられた。

森川先生とは、2001年から社会学科の同僚として親しくさせて頂いた。ある年の春のリトリートセンターでの新入生歓迎合宿では、得意満面の顔で中華服に身を包み、逢軍さんを従え、韓服姿の板垣先生やテンガロンハットを被った私の前で「はやく真人間になりなさい」と新入生に論じた

光景が思いだされる。またその頃は、春にある関西社会学会に向けた院生の発表リハーサルも同センターで行っていた。現在は様々なところで社会学の専任教員になっている当時の院生たちは引きつった顔で「公開スパーリング」に臨んでいた。「瞬間の美味」にも書かれているが、森川先生は、だれにでも「風が通る」体験が訪れるに違いないと自明視しており、その同じ感覚で評価される院生や新入生たちには、とても恐ろしい体験だったに違いない。

森川先生からは、折に触れて「お前は小商いが多いな。かまえはもっと大きくな」とボソッと漏らされてきた。その箴言を心に刻み生きていこうと思う。

生活史研究会の思い出とその後

鵜飼 孝造

UKAI Kozo

森川先生に初めてお目にかかったのは1985年、生活史研究会の席上でした。当時、まだ大学院生だった私は、弘風館の会議室で松本通晴先生が主宰される毎月の研究会に通っていたのですが、温厚な松本先生の補佐役で、いかにも手強そうな風貌でやんちゃな言動をされていたのが若き日の森川先生でした。奈良の若草山近くの旅館で研究合宿をして、深夜まで飲みながら酔い潰れ、気がつけば布団を並べて寝ていたことを思い出します。とてもお洒落で舌鋒鋭い先生からは、その後も何かにつけて目にかけていただき、あの雄渾な筆跡の絵葉書を香港からいただいたこともありました。

それから20年後、私は新しくできた社会学部で森川先生と同僚になったわけですが、そこにいる先生はもうまったくの別人でした。松本先生以来の悲願だった大学院社会学専攻を完成させた達成感とともに、とても深い疲労感を漂わせておられました。それは他人からはうかがい知れないものなのだろうなあと感じました。間もなく先生は病気で体調を崩されることが多くなり、会議で辛そうに座っておられるお姿に、われわれ同僚はなすすべがありませんでした。休職そして退職、さらにご逝去と続く中で、先生の業績を讀める機会を失い、追悼行事もおこなえなかったことは残念でなりません。

森川先生をひと言で表すならば「コンプレックス」でしょうか。あらゆることに優れた才能を持っておられるのは誰もが認めるところですが、どこかそれを持って余しているふうで、はなはだ付き

合にくい屈折感。実際にも「森川さん」を良くいう人よりも悪くいう人の方が多い。それは人が他人を評価するときに、虚心坦懐に相手の言葉を聞いたり読んだりせずに、表面的な態度や雰囲気判断してしまうからでしょう。頭のいい森川先生のことですから、そんなことは百も承知ながら毒を吐いて人を困惑させる。いつも適当に距離を置いて付き合おうとする私などには、ずっと赤点をつけておられたことでしょう。

私が赴任した当初、「うちも所帯が大きくなって、自由勝手にはやっていけんようになった。必ず組織問題が発生する。誰かが鬼になる必要があるんや」とおっしゃっていたのが耳に残っています。当時の森川先生は、9名のスタッフをいかに有機的に機能させ、大学院生をどのように一人前に育て上げるかに大変腐心されていました。けれどもそれは森川先生が得意とする役回りではなかったのではと思います。言いたい放題の私に「わかった。もう降参や」と投げ出されることも増えていき、「大学に来て何もすることない。夕方になったら飲みに行くだけや」と寂しそうにタクシーに乗り込まれるのでした。

けれども、人間関係における忖度勘定の希薄さは、裏を返せば森川社会人類学の真骨頂でした。こちらが、いい加減なことを言おうものなら、こっぴどく叩かれるけれども、正面から物申せば「わかった」「そうしたらいいな」と聞き入れてくださいました。先生が書かれるもの話されることは、緻密に練り上げられた何の曖昧さも曇りもないものでした。そのようなスタンスは、ある文化

について記述し、あるいはマイノリティを理解しようとするときに最大限に発揮されました。森川先生の衣食住への研ぎ澄まされた美意識も、単に趣味が嵩じたのではなくて、フィールドワークの最も重要な糸口だったからでしょう。

最初の話に戻ると、研究会の成果は『同時代人の生活史』（1989年、未来社）として出版されましたが、そこに森川先生が執筆された「離島出身者の生活史」という章があります。それは東シナ海に浮かぶ甌島（こしきじま）を出て、阪神地域で働き、同郷団体を組織化していったある男性から聞き出した生活史なのですが、章の最後に付け加えられた《フィールド・ノート》には「言葉」という見出しが付けられています。甌島の人々が「島ことば」と「関西弁」を見事に切り替えながら、それぞれの地域での生活を語る様子を分析して、次のように結ばれています。

だが、彼らの出稼ぎは、決して個として都市のなかに消滅してしまうものでも、ただ糧を得るために都市を「遠くの猟場」と考えるものでもなかったように思える。むしろ彼らは島と阪神の二つの世界を等しくその生活の中で生きたのであり、さらに言えば、この二つの世界を、同郷者と共に生きる「一つの生活世界」として生きたのではないだろうか。（80頁）

貧弱な語学力しか持ち合わせていない私には、森川先生の語学力の凄さを推し量ることはできません。しかし、言葉こそが森川先生の最大の武器であったことは明らかで、それは今なお（今こそ）先端的な方法論であると思います。

森川先生の早すぎる逝去が惜しまれてなりません。